

三鷹市 吉村昭 書斎

MITAKA CITY
YOSHIMURA AKIRA
WRITING ROOM



三鷹市吉村昭書斎
MITAKA CITY YOSHIMURA AKIRA WRITING ROOM

吉村昭の「旅」

小説を書くために、さまざまな地に旅をする。人に会い、資料をいただいたり、話をきいたりする。

私は、一人で旅をする。編集者と同行することもあるが、それはきわめて稀である。人に会う時は、その人の眼の動きを見つめ、話を耳をかたひける。埋れた資料に出会った時は、やはり旅をしなければこのような貴重なものを手にできなかった、とあらためて思う。

胸の中に、これらの旅で得たものが蓄積され、それが充満したのを感じた時に、小説の筆をとる。

【あともがき】①史実を追う旅（平成3年 文春文庫）



ボストンバック 三鷹市蔵
銀座和光で購入。中地のビニールを修理する際と
愛用していた。

吉村昭は、戦史、歴史、医学、動物、漂流、監獄などをテーマとした小説を執筆しました。どの題材でも現地での徹底した調査を重ね、証言者や専門家等への取材を行い、図書館や古書店をめぐって資料を収集しました。国内では、北海道に150回以上、長崎に107回、宇和島に50回以上、田野畑村や各作品の関連地域へと、数えきれないほど旅をしました。海外は2度ほどで、『神々の沈黙』（昭和44年朝日新聞社）の執筆のためにロンドン、パリ、ケープタウン、ニューヨーク、ハワイを巡る約1カ月半、『ボーツマスの旗』（昭和54年新潮社）の執筆のためにボーツマス、ボストン、ニューヨークを巡る約1週間、旅をしました。

北海道

北海道を舞台とした吉村作品には、『神々の沈黙』、『北天の星』、『龍嵐』、『赤い人』、『間宮林蔵』、『破獄』、『夜明けの雷鳴』などがあります。北海道の歴史や自然は、吉村の執筆の原動力となりました。吉村は数々のエッセイで、執筆のために調査したエピソードを記していますが、『冬の海—私の北海道取材紀行』(昭和55年筑摩書房)では、何年にもわたる苦労や吹雪の中での過酷な取材などについて振り返っています。

なぜ、北海道を舞台にした小説を数多く書くのか、と、しばしばたずねられる。(中略)

歴史上、私が最も関心をいだいているのは江戸後期から明治維新にいたる歲月で、それは北海道なしでは考えられず、それは北海道上樺太とともに北海道へ眼がむく。

「五十鈴某官のことなど」(『史実を追う旅』平成3年 文春文庫)



ボストンバック 三鷹市蔵
イタリヤ製で軽量、北海道や長崎へ行く時に使用していた。

長崎

長崎を舞台とした吉村作品には、『戦艦武蔵』、『冬の鷹』、『ふおん・しいほるとの娘』、『長英逃亡』、『海の祭礼』、『ニコライ遭難』、『暁の旅人』などがあります。長崎県立長崎図書館をはじめ、古書店や関係機関へ資料調査に訪れ、長崎県より長崎奉行に任命された吉村の書斎は、『長崎関係の資料が現地より揃っている』(津村節子『桜遍路』平成20年 河出書房新社)と言われるほどでした。

長崎は、私の好きな町である。初めて長崎を訪れたのは、昭和四十一年の春だから、八年前のことになる。その頃、私は、小説『戦艦武蔵』の執筆準備に取りくんできて、『武蔵』を建造した三菱重工業の長崎造船所におもひいたのである。

「ネの名産巻役 みつびし余聞」(『七十五度目の長崎行き』平成25年 河出文庫)



ボストンバック 三鷹市蔵
『戦艦武蔵』の調査時より使用していた。

私の靴の中には、十三冊の大学ノートと録音したテープ四巻が納まっていた。私は取材の旅がほぼ終わったことを知った。

旅の楽しみは、その地の酒を飲み、その地で産する食物を口にするので、これがあるからこそ旅にやる気にもなる。

「旅の夜」(『旅行靴のなか』平成4年 文春文庫)

タイトルに「旅」とつけられた吉村の書籍には、『万年筆の旅作家のノートⅡ』、『旅行靴のなか』、『史実を追う旅』などがあります。執筆調査の旅にまつわるエピソードが収められ、吉村の多彩な才能が感じられます。また、旅は酒とその土地の食文化を楽しむものでもありました。



吉村昭(1998年撮影)

三鷹市
吉村昭
書斎

MITAKA CITY
YOSHIMURA AKIRA
WRITING ROOM

〒181-0001
東京都三鷹市井の頭3-3-17
TEL:0422-26-7500
HP:https://mitaka-sportsandculture.or.jp/yoshimura/

京王井の頭線井の頭公園駅より徒歩3分
右のQRコードからアクセス!

